

「子宝騒動」と「明け行く空」

佐藤 忠男

映画評論家
日本映画学校校長



斎藤寅次郎（一九〇五～一九八二）は、一九二六年から一九六二年までの三六年間に二〇〇本を越える映画を作った監督である。平均して年間六本以上。初期にはまだ無声映画時代で短篇が多かったとはいえ、驚くべき超売れっ子だった。その作品の大部分はいわゆるドタバタ喜劇である。ドタバタというと低級と見られがちであるが、あの偉大なチャップリンやキートンもジャンルとしてはドタバタ＝スラップスティックに属するものであった。無声映画時代においては、意表をつくパントマイムのアクションに次ぐアクションで軽々と現実を超越するこのジャンルこそは映画表現の独自性と新しさのあかしとして大いに愛され、敬意を表されたものである。そして日本で、チャップリンやキートンと比較できるドタバタの名手だったのが、松竹蒲田撮影所で大活躍していて「喜劇の神様」と呼ばれた斎藤寅次郎なのである。トーキー以後は喜劇は歌謡映画と半ば一緒のものになり、斎藤寅次郎ならではの過激なスラップスティック（ひっぱたき）の笑いを発揮する機会が少なくなったため、量産を続けたわりには目立たない存在になったが、日本映画史上の天才的な才能の持主のひとりだったことは忘れてはならない。

とはいえ、残念なことに、彼がその天才ぶりをいかに発揮したサイレントの短篇喜劇は殆んど失われてしまっている。完全なかたちで残っている傑作はマツダ映画社が保存したサイレント時代も最末期の一九三五年のこの作品ぐらいである。この作品ははじめ「産児無制限」という題で貧乏人の子沢山の世相を当時の産児制限運動にひっかけて笑いのタネにしようとしたが、皮肉がきつすぎるというクレームがあって「子宝騒動」というまことに無難な題に変えられたと伝えられている。しかし子どもがつぎつぎと生まれる貧乏人の苦労を遠慮会釈なく笑いとばすという発想の過激さはギャグに次ぐギャグのけたたましいまでの連発となって、笑いを通り越して見る者を驚かせる。主演の小倉繁は当時世界中にいたチャップリン風コメディアンのみ。チャップリンの真似から出発したがやがて独特の味わいのある役者になった。

もう一本の「明けゆく空」は一九二九年の長篇で、斎藤寅次郎としては珍しい、ドタバタでない心温まる作品である。シナリオを書いた水島あやめは、日本映画のサイレント時代に何人かいた女性のシナリオ作家たちのなかでいちばん多作だった人で、女性的なやさしい家族愛のテーマを大事にした松竹蒲田撮影所の主流の作風がよく分かる作品であり、これが完全なかたちで保存されていたことはたいへん嬉しい。